『Jane Eyre』における自己実現

1U220790-7　向井悠人

　女性の社会的権利を主張することから始まった「フェミニズム」は19世紀末から台頭し、多くの女性たちは社会における自己実現の場所を公に求めるようになっていった。[[1]](#footnote-1)そういった中で、シャーロットブロンテは19世紀前半ごろに小説“Jane Eyre”を執筆した。こうしたことを踏まえるとシャーロットブロンテの作品における女性の思考や権利の主張を読み解いてくことで、この時代のフェミニズムや人権に対する最先端の考え方を知ることができるかもしれない。今回のレポートでは、この“Jane Eyre”を通してシャーロット・ブロンテが女性の権利や自己実現についてどのような考えを持っていたのかについて考察していく。

　“Jane Eyre”が出版された1847年のイギリスは、「1847年法」と呼ばれる世界的にも初めての工場法が成立し、一般市民運動家らによる普通選挙への関心が高まるなど労働者階級の運動が活発になっている時期であった。[[2]](#footnote-2)こうした運動の高まりから女性たちも徐々にそれぞれの自己実現の権利について主張するようになり、後のフェミニズム運動に繋がっていくこととなった。こうした時代の中で、女性の自己実現の自由について描いた作品を書いたのがシャーロット・ブロンテである。ブロンテは“Jane Eyre”の主人公ジェーンを通して、当時の社会の理不尽さを乗り越えながら女性が経済的、精神的に自立していく様を描いている。

　19世紀のイギリスにおける女性に対する社会通念について明らかにしていく。当時の女性たちに対する教育機会は階級によってばらつきはあるものの、概ね家庭の経済状況の邪魔にならない程度に抑圧されており、結果的に就労の幅もかなり制限された。女性がリスペクタビリティを失わずにつける仕事はガヴァネスか教職のみとされ、そうした女性たちに求められていたことは職を見つけて経済的に自立することではなく、結婚した過程を守ることである。[[3]](#footnote-3)このように、SDGsなどジェンダー平等に対する関心が高まり、こうした性別による格差に対する問題を持つことが当たり前になった現代とは全く異なる価値観がスタンダードとされていたのが19世紀のイギリス社会であり、“Jane Eyre”はこうした時代下で書かれた作品であることを改めて考慮する必要がある。

　ここまで述べてきたとおり、“Jane Eyre”が書かれた19世紀のイギリスでは、女性の自己実現の機会はかなり抑圧されていた。しかし、こうした中でもジェーンは一貫して主体的に自己実現を追求しており、その様子は多くの場面で見ることが出来る。第1章では10歳前後のジェーンのローウッド校での生活が描かれているが、ここでジェーンは同級生や周囲の大人から差別的な扱いを受けながらも、“You are like a murderer—you are like a slave-driver—you are like the Roman emperors!”[[4]](#footnote-4) と決して無条件に従うのではなく自分が違うと感じたことに対しては大人に対しても反抗の姿勢を見せており、自分が自由という権利を持った独立的存在であることを示している。また、ソーンフィールドでの生活中でもそれを垣間見ることができる。第12章ではジェーンがソーンフィールドでの安定した生活に幸せを感じつつも、より広い世界を見てみたいという人間としての欲求について語っている。　“Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer...”[[5]](#footnote-5) この部分を通じて書かれてる、人間として外の世界、つまりは社会で活躍することに対する欲求があるのは当然であり、女性も努力し自身を磨く権利があるという主張は、ブロンテがジェーンを通して伝えたかった一番のメッセージなのではないだろうか。第12章の後半部分を丸々使ったこの主張は、当時のイギリス社会を生きたブロンテ自身が感じていたことの表れであると考える。また、第35章にてジェーンがセントジョンからの求婚を拒否する場面も、ジェーンが持つ強い自己実現に向けた意思を表している。　“I will be your curate, if you like, but never your wife.”[[6]](#footnote-6)　という台詞は、愛情のない婚姻関係を望まないといった意味合いだけでなく、あくまでもセントジョンに対して対等な関係であるというジェーンの姿勢が示されていると考えられる。そして最終的にジェーンはロチェスターの元へ戻り、自身が望んだ結末を迎えていることから、物語序盤から一貫した意志の実現を果たす。このように、序盤から最後までジェーンは女性の自己実現が抑圧された社会の中で強い意思を持って自分の望みを叶えた人物として描かれたのである。

　ここまでの話を踏まえ、作者であるブロンテがこの作品を通して伝えたかったことを考察する。先にも述べたが、ブロンテが活動していた19世紀前半は、労働者階級の市民たちの間で、それぞれの労働環境や参政に対する関心が高まり、いわば権力を持たない人たちが自らの権利を主張し始めた期間であると考えられる。そして、ブロンテが亡くなった後の19世紀後半に入ると、女性もそのような権利を主張するための活動を始めるようになり、フェミニズムの考え方が台頭することとなった。こうしたことから、ブロンテは自らの作品を通して女性の自己実現の権利を主張した、いわばフェミニズムの先駆けのような人物であると考えられる。ブロンテが、“Jane Eyre”を通じて女性が自己の尊厳を守り、自立した人物として自己を形成していく過程を描くことで、世の中の女性に対して自己実現のモデルケースのようなものを提示することになったのではないだろうか。

参考文献

・Charlotte Bronte , Jane Eyre ,Oxford World Classics

1. IDEAS FOR GOOD,‘フェミニズムとは・意味’, 2025/01/13

   https://ideasforgood.jp/glossary/feminism/#:~:text=フェミニズムとは、性差別,を訴える運動である%E3%80%82 [↑](#footnote-ref-1)
2. 公益社団法人　教育文化協会,‘女性の社会進出と労働運動 ―これまでの歩みから学ぶこと―’　2025/01/13

   <https://www.rengo-ilec.or.jp/seminar/saitama/2008/youroku03.html> [↑](#footnote-ref-2)
3. 牟田有紀子, ‘19 世紀イギリスにおける 「少女」に関する議論とその転換点’, p45-47, 2025/01/13 [↑](#footnote-ref-3)
4. Charlotte Bronte , Jane Eyre ,Oxford World Classics, p11 L9 [↑](#footnote-ref-4)
5. Charlotte Bronte , Jane Eyre ,Oxford World Classics, p107 L27 [↑](#footnote-ref-5)
6. Charlotte Bronte , Jane Eyre ,Oxford World Classics, p402 L24 [↑](#footnote-ref-6)